

青森県におけるブドウ品種 ‘ルビー・オクヤマ’、‘ブラック・アイ’、
‘ヤトミローザ’ 及び ‘ロザリオ・ビアンコ’ の果実特性

福 田 典 明・内 藤 誠*

(青森県りんご試験場県南果樹研究センター・*八戸地域農業改良普及センター)

Fruit Characteristics of Grape Cultivars ‘Ruby Okuyama’, ‘Black Eye’,
‘Yatomi Rosa’ and ‘Rosario Bianco’ in Aomori Prefecture.

Noriaki FUKUDA and Makoto NAITO*

(Kennan Fruit Tree Research Center, Aomori Apple Experiment Station・)
*Hachinohe Regional Agricultural Extension Service Center

1 は じ め に

青森県におけるブドウの栽培面積(1997年産果樹栽培状況等調査)は約448haであり、品種は‘スチューベン’の217.7ha及び‘キャンベル・アーリー’の165.2haで約86%を占めている。一方、近年の消費者嗜好に向く‘巨峰’群を始めとした良食味大粒系品種は全面積の1%程度と極めて少ない状況にある。これは、垣根仕立てや温量指数の不足、特に県南地方では開花期のヤマセによる花振るいなどにより作りやすい品種がなかったことが原因であると考えられる。そのため本県でも無加温ハウス栽培で安定生産が可能な品種を選抜するため1979年から40以上の系統品種を検討してきた。その結果、対照品種の‘巨峰’と比較し、花振るい性や食味等が優れていたブラジルの奥山氏育成の‘ルビー・オクヤマ’、青森県の沖田氏育成の‘ブラック・アイ’、東京都の矢富氏育成の‘ヤトミローザ’及び山梨県の植原氏育成の‘ロザリオ・ビアンコ’の4品種を試作品種等として普及を図っている。そこで、本県におけるこれら4品種の果実特性について報告する。

2 試 験 方 法

供試品種は、当研究センターの無加温ハウス内で垣根(改良マンソン)仕立て両側一文字整枝長梢剪定で栽培されているテレキ系台‘ルビー・オクヤマ’1樹、自根‘ブラック・アイ’1樹、FS04台‘ヤトミローザ’(土中埋設60ℓポット栽培)1樹及びF5BB台‘ロザリオ・ビアンコ’(土中埋設30ℓポット栽培)2樹、対照品種は‘巨峰’を用いた。摘心は、いずれの品種も1回目は開花1週間前頃に第1花穂の上位4～5葉で摘心し、副梢は上位1本を残した。2回目は前回残した副梢の展葉8枚頃に上位6葉で摘心を行い、以降過繁茂にならないよう随時摘心を行った。ハウスの被覆月日は、1993年が4月5日、1994年が4月11日、1995年が4月7日、1996年が4月10日、1997年が3月26日、1998年が4月3日であった。灌水及びハウス内の温度は本県における‘キャンベル・アーリー’の無加温ハウス栽培技術体系に準じて管理した。病害虫防除は本県の「ブドウ‘スチューベン’基準」を参考に適期に散布した。施肥は樹勢に応じて実施した。

表 1 品種別花振い性

年	品種 ルビー・ オクヤマ	ブラック ・アイ	ヤトミ ローザ	ロザリオ・ ビアンコ	巨峰
1993	少	やや多	—	少	多
1994	少	やや多	少	少	多
1995	少	中	少	中	多
1996	少	多	少	少	多
1997	少	やや多	少	少	多
1998	中	多	中	少	多

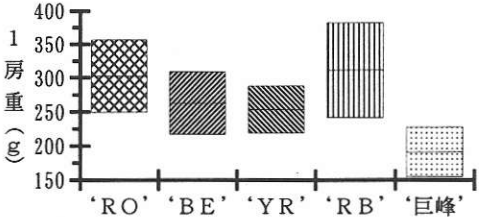


図 1 品種別 1 房重の標準偏差

表 2 品種別の果実の渋味

年	品種 ルビー・ オクヤマ	ブラック ・アイ	ヤトミ ローザ	ロザリオ・ ビアンコ	巨峰
1993	中	少	—	中	中
1994	中	少	中	中	少
1995	中	少	中	少	少
1996	中	少	中	少	少
1997	中	中	少	無	少
1998	—	—	極少	極少	—

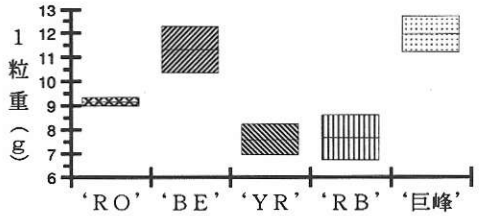


図 2 品種別 1 粒重の標準偏差

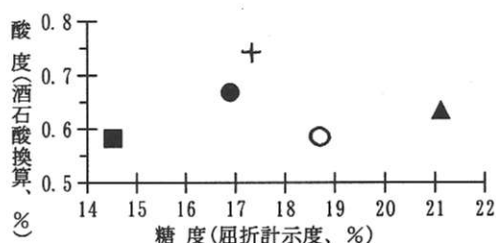


図3 品種別平均糖度及び平均酸度

注) 'RO'、●: 'ルビー・オクヤマ'
'BE'、○: 'ブラック・アイ'
'YR'、■: 'ヤトミローザ'
'RB'、▲: 'ロザリオ・ビアンコ'
+: '巨峰'

調査は、開花期、花振るい性及び果実品質等を1993年から1998年までの5～6年において実施した。

3 試験結果及び考察

(1) 'ルビー・オクヤマ'

開花期は'巨峰'よりやや遅い6月中下旬で、花振るいは少なかった(表1)。収穫始めは平均で'巨峰'より5日遅い11月6日、満開日からの日数は 143 ± 7.4 日であった。果房は円錐形で平均300g程度(図1)、果粒は果皮が赤褐色で1粒重が平均9.1g(図2)の短楕円形であった。食味は、糖度が17%程度で酸度が低く良好であった(図3)が、渋味は中程度であった(表2)。裂果は少なかった(表3)。マスカット香で、果肉の特性は崩壊性で、硬度はやや軟らかかった。脱粒性はやや難であった。

(2) 'ブラック・アイ'

開花期は'巨峰'とほぼ同じ6月上中旬で、花振るいは多い傾向にあったが'巨峰'より少なかった(表1)。収穫始めは平均で'巨峰'より約1ヵ月早い9月29日、満開日からの日数は 115 ± 8.8 日であった。果房は円錐形で平均260g程度(図1)、果粒は果皮が紫黒色で1粒重が平均11.1g(図2)の倒卵から短楕円形であった。食味は糖度が19%程度あり、甘酸適和で良好であった(図3)が、渋味はややあった(表2)。裂果は年により発生した(表3)。フォクシー香で、果肉の特性は中間で硬度は中位であった。脱粒性は中位であった。

(3) 'ヤトミローザ'

開花期は'巨峰'とほぼ同じ6月中旬で、花振るいは少なかった(表1)。収穫始めは平均で'巨峰'より2ヵ月早い9月3日、満開日からの日数は 91 ± 6.7 日であった。果房は円錐形から長円錐形で平均250g程度(図1)、果粒は果皮が紫赤色で1粒重が平均7.6g(図2)の長楕円形であった。食味は糖度が15%程度で果汁が多く良好であ

表3 品種別の果実の裂果性

年	品種 ルビー・オクヤマ	ブラック・アイ	ヤトミローザ	ロザリオ・ビアンコ	巨峰
1993	無	無	—	無	無
1994	少	無	無	無	無
1995	少	無	無	無	少
1996	少	少	多	無	無
1997	少	少	中	無	少
1998	—	—	多	無	—

た(図3)が、渋味は中程度であった(表2)。裂果は年により多かった(表3)。香気はなく、果肉の特性は崩壊性で、硬度はやや軟らかかった。脱粒性はなかった。

(4) 'ロザリオ・ビアンコ'

開花期は'巨峰'よりやや遅い6月中下旬であり、花振るいは少なかった(表1)。収穫始めは平均で'巨峰'より5日早い10月27日、満開日からの日数は 131 ± 6.6 日であった。果房は円錐形で平均310g程度(図1)、果粒は果皮が黄緑色で1粒重が平均7.7g(図2)の短楕円形であった。食味は、糖度が21%あり、さわやかな甘さで良好であった(図3)が、渋味は年によりややあった(表2)。裂果はなかった(表3)。香気はなく、果肉の特性は崩壊性で硬度はやや軟らかかった。脱粒性は中位であった。

(5) 考察

いずれの品種も無加温ハウス栽培において対照品種である'巨峰'より花振るいが少なく、房も大きいことから安定生産が可能であり、食味も良好であった。また、収穫期が異なるこれら4品種を導入することにより、労働力の分散による栽培規模の拡大が期待されると考えられた。しかし、全般的に遅伸びするため適正着果に努め、樹勢に応じた施肥管理により結果枝の充実を図る必要があると思われる。なお、本県にはこれらの品種用の病害虫防除暦がないので、'スチューベン'基準の防除暦を参考に生態に合わせた適切な薬剤散布を行う必要があると思われる。

4 ま と め

本県において'ルビー・オクヤマ'、'ブラック・アイ'、'ヤトミローザ'及び'ロザリオ・ビアンコ'は無加温ハウス栽培で良食味果実が安定生産できることから「落葉果樹栽培の手引き(青森県農林部りんご課資料)」等により普及に移している。その中で2.5m×7.0m(57本/10a)植えの垣根仕立て一文字整枝長梢剪定とし、摘心は1回目を開花1週間前頃に第1花穂の上位4～5葉で行い、副梢は上位1本を残し、2回目を前回残した副梢の上位6葉とする栽培を行うこととし、その場合の目標収量を'ルビー・オクヤマ'が1.1t、'ブラック・アイ'が0.9t、'ヤトミローザ'及び'ロザリオ・ビアンコ'が1.0tとしている。しかし、栽培管理等でまだ不十分な点もあるので今後さらに検討が必要であると思われる。